

## フェドー『窓から』 翻訳と解説

桑 原 隆 行

### 窓から

上品な客間。奥に、玄関に面したドア、左、前景に窓。— 右、中景に、鏡の載った暖炉。左、中景にドア。— 舞台中央に、食卓。  
— 肘掛け椅子、椅子、等々。

### 第一場

幕が開くと、ワイシャツで白エプロンのエクトールがテーブルに食器を並び終える。

エクトール ひとり。さあ！まあまあ！初めてにしては！悪くない。ああ！誰かが鬚とエプロン姿のぼくを見たら、きっと、すぐに思うのだらうな、ぼくが……とんでもない！まったく違う！……ぼくは弁護士だ！……誓って言う！……ぼくのせいじゃない……ああ！いやはや！違う……ママがそう望んだのだ。ある日、乳母のところで、八ヶ月の時だ……いつまでも覚えている！ママはぼくを頭から爪先までしげしげと見たあとで叫んだ、弁護士にするわ！それで、ぼくは弁護士だ……以上！結婚したのもまた、そんなふうだ。ぼくのせいじゃない！……ああ！いやはや！違う！……ママがそう望んだのだ……ぼくに言った、「これがお前に必要な奥さんだよ！」—それで、ぼくは分かったと言った。不平を言っているのではない……ぼくの妻は最高にキレイだからね！……でも、嫉妬深い！……異常なほど嫉妬深いので、昨日の朝、ものすごく突っかかってきた、ぼくが用事を言いつけながら家のメイドのローズを見ていたからという理由で……だから夜、スリッパが欲しくなったので、今度は妻の方を向いて、反対側にいたローズに言ったわけさ。「ぼくのスリッパを持ってきてくれー！！」これなら妻もぼくがローズを見ていたなんて言えないからね！ところが何と！妻は怒り狂った！使用人の前で用事を言いつけられるなんて、と言うと、ローズを首にした後、実家のお母さんのところに行ってしまった。その結果、昨夜から、ぼくは夫婦の住居にひとりである……ひとり、でも階下の住人ボタン夫人に監視されているのさ、ぼくが外出したかどうか、ぼくにどんな訪問客があったか、必ずぼくの妻に報告する、ぺちゃくちゃ、ぺちゃくちゃ……（床に向けて話す。）そう、でも、あなたは悔しがっている！ですね、ボタン夫人？訪問客はいなかったし、ぼくは外

出していない。（テーブルのところに行って。）さて、昼食にするか……妻のいない昼食……まあ仕方ない！……彼女が好き、大好きだから！彼女のためなら殺されてもいい……でも、空腹で死にたくはない……空腹で死ぬ、それが理解されるのはちゃんと夕食をとったときだけだ。（ベルが鳴る。）おや！ベルだ！一体誰かな？誰も来る予定はないけれど。（またベルの音。）あっ！妻だな！ベルの音で分かる。（何度もベルの音。）はい！はい、今！  
退出。

### 第二場

エクトール、エンマ

エンマ すごく興奮して。何なの！聞こえなかったの？  
エクトール 優雅に。しっかりと、マダム、でも……  
エンマ 真似して。《しっかりと、マダム、でも……》馬鹿ね、まったく！  
彼の前を通り、窓に行き、窓ガラスを通して見る。  
エクトール えっ！（傍白）ところで、こんなことを言うためにぼくに会いに来たのか！（大声で）すみませんが、マダム、でも……  
エンマ そのままで。さあ、早く！あなたのご主人を！  
エクトール ぼく的主人？ ぼくですが、マダム。  
エンマ そのままで、肩をすくめて。何と！あなたが！まあ！まったく、あなた、どうかしているわ！  
エクトール エプロンはずして、フロックコートをまた着て。いいえ、マダム、ぼくは弁護士なんです！  
エンマ 振り向いて。弁護士！  
エクトール ええ、マダム。  
エンマ 前に進んできて。何と！それでは、あなたが……  
エクトール ええ、マダム。  
エンマ まあ！ムッシュー！大変な失礼を！あなたを馬鹿扱いしてしまうなんて！  
エクトール 優雅に。ああ！まあ、よく知らない人の場合ですから！  
エンマ 本当にごめんなさいね！  
エクトール お辞儀して。ああ！マダム！……どういたしまして。ところで、どんなご用か教えていただけますでしょうか？

エンマ そうでしたわ、ムッシュー。  
帽子とコートを脱いで、左側の椅子に置く。  
エクトール 傍白。ええっ！……こりゃ！また。ゆっくりするつもりなのか？畜生！……こちとら昼食がまだなんだぜ！  
エンマ とても興奮して。ムッシュー！……  
エクトール マダム！……  
エンマ あなたは紳士かしら？  
エクトール コルネイユの韻文の記憶に駆られて、朗々と唱える。「あなたの子供ですから、ことは……」ああ！何とおっしゃいました、マダム？  
エンマ 強調して。あなたは紳士かしら？  
エクトール まあ、マダム、場合によりますな！紳士と貴族の二つがありますが、ぼくはエクトール・ブシャールという名前です。  
エンマ まあ！解っていませんね！わたしが話しているのは……道徳的な意味で……  
エクトール ああ！道徳的に！それは、もう、マダム、十分に紳士ですとも！……(傍白)つまり何が言いたいのんだ？  
エンマ あの！ですね。お願いしたいことがあって来ましたの！  
窓の方に目をやる。  
エクトール 傍白。ああ！畜生、深入りし過ぎた！  
エンマ 大変な！  
エクトール 傍白。大変なだって！なんだってんだ、畜生！知り合いでもないのに、この夫人とは！それに、もし妻が戻ってきたら……  
エンマ 私、結婚しておりますの、ムッシュー。  
エクトール 本当ですね、マダム！(傍白)ふうー！ほっとした。(大声で)では、どうぞお座りください。彼らはテーブルの右に座る。  
エンマ 夫がいますの、ムッシュー！……  
エクトール 当然でしょうな。  
エンマ どうして当然だと？  
エクトール 当然と言ったのは、それは……あなたは結婚しているわけですから！……(傍白)昼食が冷めちまう。  
エンマ ええ、夫がいますの！嫉妬深い夫！怒りっぼくて……私に食ってかかってばかり。  
エクトール ああ！分かります。  
エンマ 分かってくださる？  
エクトール もちろんです！ぼくに頼みごとがあって来たんですね。  
エンマ お察しの通りです。  
エクトール 民法典を手にとって。それ！では、喜んで、マダム！……さてさて！あなたの夫が浮気をしている？……手紙をお持ちですか、彼の不利になる一件書類を構成しうるような何かでも？  
エンマ 彼の不利になる？……一件書類？まあ、それっ

て！あなた、一体何を思っているの？  
エクトール さて、マダム、ぼくは思って……あなたが離婚を求めたがっているのだと思いまして……それで、弁護士として……  
エンマ 私が、離婚訴訟！でも、あなたにそんなことは一度も言っていないわ……夫を愛しているのですもの、私は、ムッシュー！……  
エクトール ああ！それは結構！それじゃ、何のご用で？……そして何がご不満で？  
エンマ それは、夫が嫉妬深いこと。  
エクトール それ！では、ぼくのせいじゃありませんよ、ぼくのね！(傍白)どうしてこんなことを話しに来るんだ？  
エンマ 立ち上がり、怒った口調で。でもね、ムッシュー、嫉妬する理由なんてないんです、お分かり？理由はないの！というのも、とやかく言っても、私にはやましいことはないんですから！  
エクトール ところで、マダム、指摘しておきますが、ぼくはまったく何も言っていないから。(傍白)ああ！まったくカッカとさせてくれるぜ、誓って言うが！  
エンマ コミカルな興奮を見せ、深刻そうに窓に行つて。非難するなんて、私をよ！浮気していると非難する！食ってかかる！愛していないんだと私に言うなんて、恩知らず！  
エクトール 傍白、テーブルに行つて。まさか！出て行かないつもりか！腹がへって死にそうだ！  
エンマ 決然として、間にテーブルを残すような形で彼のほうにやって来て。ムッシュー、あなたの家に来ましたのは、あなたはお隣さんだし、私の家の真向かいに住んでいるからですの。  
エクトール 光栄です、マダム。(傍白)こんなふうになんか近所中を回って歩くつもりか？  
エンマ 窓の近くの椅子に座りながら。さて、それで、ムッシュー、私を口説いてくださいな！……  
エクトール (傍白)えっ？……ぼくが何……？それにしても、どうかしてるよ！(大声で)何ですって！つまり、あなたは……？  
エンマ 愛想よく、立ち上がると彼の方に進んで来て。お願いですから、ムッシュー……でも、まずは、あなたに対するわたしの気持ちがどういふものか知っておいていただきたいの。  
エクトール 少し自惚れた様子でお辞儀しながら。ああ！マダム！(傍白)夢見がちな女だ！ロメオを求めるジュリエットみたい！  
エンマ 愛想よく、そして少し困惑気味に。ムッシュー！あなたって不細工な顔なのね……  
エクトール えっ？  
エンマ なお一層愛想よく。話を遮らないでくださいな！あなたは不細工な顔で、下品、少し馬鹿みたいだわ、お

腹が出てきているわよ、全然私のタイプじゃないから、全然、全然。

エクトール 嘩然として。何ですと！マダム……ええと……ええとご親切に……本当に！ぼくは……（傍白。）

ああ！思うに、褒め言葉にしては少し無遠慮だよな。

エンマ 相変わらず愛想よく。以上があなたの見た目ですよ、ムッシュー……

エクトール 腹を立てて。少し理想化イデアリスムが足りませんが。

エンマ まあ！どうしろと！私は印象主義者アンプレシヨニストですの！それに、あのね、遠慮なく言わせてもらったのは、あなたが私のタイプだと思い込んだりしないためなの。

エクトール ぼくが、マダム、そんな想像をしても！

エンマ 窓の方を見ながら。まあ！だって男の人ってとても自惚れが強いんですもの！

エクトール （傍白。）まあ！確かに言えてる。

エンマ 断固たる口調で。これで、あなたは自分が好かれているわけではないことを確信できたわけだし、どう対処したらいいか心得ているのだから、さあ！始めましょう、口説いて！

また椅子に座りに行く。

エクトール そんな！まあまあ、マダム！ふざけてますよ！馬鹿な考えであると認めなさい！

エンマ だって、全然そうじゃないわ！

エクトール まったくもう！ぼくに信じろと……まあ！ほら、そんなお芝居は終わりにして、どうしたいのか正直に言ってください。

エンマ ついにはあなたが私を口説くようになってほしいの、ここで。

いる場所を示す。

エクトール でも、マダム、あなたを愛してはいませんが。

エンマ 立ち上がると、素早く彼のところに来る。だから！私が愛しているとでも思っているの、私が？

エクトール でも、あなたを存じ上げないのですが。

エンマ 私だって！

エクトール でも、結婚しているのですが。

エンマ だから！私もよ。

エクトール 怒って。ああ！腹が立つ！

テーブルの上に乗る。

エンマ 右に移動して。まあまあ、ムッシュー、お願いしているのは、でもとても簡単なことよ！……分かっているのね、私は夫を懲らしめてやりたい、あの人の果てしない口論、絶えざる非難の仕返しをしたい、それあなたがあなたに手伝ってほしいとお願いに来たの……やっとな、お分かり？

エクトール テーブルの上で。ぼくが、もし、ぼくが……皆目。

パンの皮を取って、こっそりと食う。

エンマ （傍白。）ああ！男たちときたら！馬鹿が嫉妬深いか！（大声で。）だから！別にかまわないの！始めましょ

う……窓のそばに来て。

窓を開けようとする。

エクトール 右端に逃げて行き。えっ！一体何をするんです、マダム？

エンマ 見ての通り、開けるのよ！

エクトール でも、ひどい寒さですよ！

エンマ だから！暖炉に火を！……お宅のは消えてるわ！

エクトール 昨夜からなんです、でも窓が開いていたら、火をつけても何にもなりませんよ……！氷点下5度……ともかく閉めて、マダム、いいから閉めてください！（傍白。）ああ！まったく、こいつはどうかしている！……

エンマ 真向かいの家を指差して。閉めるですって！でも、それじゃ、どうやって私たちをアルシビアドに目撃してもらうというの？

エクトール アルシビアド！そいつは誰？古代の人アルシビアドのこと？

エンマ 古代人？私の夫が？

エクトール ねえ！あなたの夫のことなんて知ったこっちゃない！

エンマ 彼のところにやって来て、横柄に。その妻に話していることを忘れないで！

エクトール 嘩然として。えっ？何ですって、誰の妻？……あっ！そうか、彼女の夫……アルシビアドの、合点。窓を閉めてください！

エンマ （傍白。）どうかしてるわ、全く！

窓のところに戻る。

エクトール （傍白。）完全に頭がいかれてる！（大声で。）どうしても窓を開けたままでいるつもりなら、前もって言うておきますが……ぼくは風邪をひいてしまう。

エンマ へえー！ハンカチを貸してあげるわよ。さあ、来て！

彼の袖をひっぱり、窓の方に連れていく。

エクトール （傍白。）ああ！腹が立つ。（大声で。）せめて、肩に何かはおらせて。

エンマ ほら！私のコート、毛皮よ。（彼の肩にコートをかけてやる。）さあ、さて、早く始めましょう、お願い……腰掛ける。

エクトール 倒れ込むように座り。冗談じゃない、畜生！昼飯は何時に食べるんだ？

パンの皮をまたつまみ食いする。

エンマ 立ち上がり。何ですの、ムッシュー！お昼はまだでしたの？まあ！どうして言わなかったの？本当に申し訳ないわ！（テーブルの前を通過して。）ねえ！私って馬鹿ね、このテーブルを見て気付くべきだったわ……まあ！いっぱい謝らなくては！……さあ、早く、ムッシュー、テーブルについてお昼を食べましょう！彼女は腰掛ける。

エクトール 茫然として、傍白。何が、お昼を食べましょうだ？招待してもいないのに。（立ち上がり、大声で。）す

みませんが、マダム、でも……  
エンマ 何とおっしゃいました？  
エクトール 何って、マダム、すみませんが、あなたを招待してはおりませんですよ。  
エンマ 愛想よく。大したことではないわ、ムッシュー、許してあげる！……さあ、ここに座りなさいな、私の右……特別席に……  
エクトール 座りながら、茫然として。特別席？(傍白)冗談じゃない！でも、まさか、いまや、ぼくが彼女に招待されているわけか！  
エンマ まあ！食器が足りないわ！では、お宅の使用人を呼んで！……  
エクトール 家の使用人、それはぼくですが……  
エンマ でも、あなた何と言っていた、弁護士だと言っていたわよね？  
エクトール ええ。弁護士は職業で、使用人は臨時で。妻が使用人を首にしたものですから。  
エンマ まあ！同じね、私もメイドを首にしたの！……それ！じゃ、給仕係のあなたが、食器を取りに行ってきた。  
エクトール でも、マダム……  
エンマ 何よ！だって、行けないわよ、私は！置き場所が分からないんですもの！……さあ、まあまあ……ほら！  
イライラと足を踏みならす。  
エクトール (傍白) ああ！ひどすぎる！(大声で)絶対イヤです！  
エンマ 何て言いました？再び足を踏みならす。  
エクトール (傍白) 畜生！階下のポタン夫人に聞こえる。(大声で)行きますと、言ってるのです……(傍白) ああ！この女のせいでおかしくなる！退出。

### 第三場

エンマ ひとり。立ち上がり、窓のところに戻る。まあ！私の夫殿、あなたは生意気にも嫉妬するなんて！まあ！貞淑なあなたの可愛い妻を非難するとは！まあ！浮気されていると言い張るなんてね！いいわ、そういうことなら、納得させてあげる、それで、嫉妬で胸が張り裂ければいいのよ、いい気味！いい気味！いい気味だわよ！足を踏みならす。

### 第四場

エクトール、エンマ

エクトール どすん！はい、どうぞ！食器をお持ちしました！ぶるっ！ここに入ると、なんて寒いんだ！  
エンマ まあ！あなたね！ねえ！手伝って！  
テーブルの端を持つ。

エクトール 何ですって、手伝えと！  
エンマ その通り！このテーブルを窓の近くに運ぶのを。  
エクトール 憤慨しながら、テーブルの反対の端を持って。  
えっ！まさか、とんでもない！えっ！そんな！ほんとに、うんざりだ！……  
テーブルを持ったままの行ったり来たりの所作。  
エンマ テーブルを放して。何なの、拒否？  
エクトール ええ、お断りです……常識外れもいいとこだ。二月の最中に窓辺で昼食なんて見たためしがない……馬鹿げてる！……ものす……ものす……ものすごく馬鹿げてる！……(くしゃみする。)まったく！ほら！まさに、風邪をひいた！  
エンマ 望みがありませんように！  
エクトール (傍白) とんでもない！  
エンマ ムッシュー、申し上げておきますが、もし、お願いしたことをすることに同意してくれていたら、ずっと前にすべて終わっていたのにね。  
エクトール (ひどい風邪声で) バダブ、ほうす上げておきますが、ほぐも、ますが……ますが……(何度もくしゃみをする。)まったく、完全に風邪をひいたぞ！  
ナプキンを頭に被り、首でネックチーフのように結ぶ。  
エンマ とにかく、言っておきますが、お願いすることをしてくれないのなら、ここであなたに口説かれたと奥様に言いつけに行きますから！  
エクトール えっ！言いつける……？だめです、それはしないで！まさか……卑劣な！(傍白) ああ！女たちときたら、畜生！女たちめ！くしゃみをする。  
エンマ 猫なで声で。だから、同意してね……  
エクトール まあまあ、マダム、まさか……よく考えてください……  
エンマ ああ！すっかり考えてのことよ。夫が私を疑ってかかるとは！罰せられればいいのよ……それも彼の嫉妬そのものによってね。これが私の復讐、私のね……  
エクトール でも、あなたの振る舞いがどういう結果になるか考えましたか？  
エンマ ああ！もちろん、それはよく分かっている……夫はあなたを殺すわね。  
エクトール ぎょっとして。えっ！ぼくを……？その間、ぼくはどうしよう？  
エンマ そうよ、夫はあなたを殺す！……あなたが殺すのでなければ……でも、あなたに私の夫を殺す勇気なんてなければいいけれど！  
エクトール でも、マダム！……  
エンマ おお！死ぬほどの決闘になる、分かっているの！よく話してくれたから。夫は闘うわよ、私たちの国での闘い方のように……ハンドドリルで……  
ハンドドリルを回す仕草をする。  
エクトール えっ！ハンドドリルで？  
エンマ そうよ、ムッシュー、ハンドドリルで！ブラジ

ルではそんなふうに闘うの！  
 エクトール それにしても恐ろしい……！  
 エンマ 恐ろしいわよ。  
 エクトール でも、ひどい！……  
 エンマ 彼の方に向かって歩きながら。何ですって、それでは不都合でも？  
 エクトール ほく？いや全然、いや全然！ハンドドリルか！……ああ！嫌だ！  
 エンマ 嫌そうな顔で。何なの！ムッシュー、あなた怖いのか？  
 エクトール でも、マダム、一度も木工師なんてしたことないんですよ、ぼくは！舞台奥に向かって行き、また前方へと来る。  
 エンマ 相変わらず嫌そうな顔で、右に移動しながら。ああ、こんなフランスの男どもときたら！  
 エクトール 駄目です！ねえ、マダム、他の提案があります。ぼくの言うことを信じてください、離婚訴訟をなさい、ずっと簡単です、それにいいですか、危険も少ない……  
 エンマ 彼の方にまた歩いて行き、窓の方に彼を後ずさりさせながら。訴訟！……でも、復讐にならないわ、それは！繰り返して言うけれど、夫を愛しているの。私の望みは夫に復讐することなの！別れることではなくて……  
 エクトール 窓の側で。しかしながら、マダム……  
 エンマ 同様に窓の側で。いいえ、そんな必要はない……（彼を無理やり座らせながら。）まあまあ、座って、口説いてみて……  
 エクトール 絶対に嫌だ！  
 エンマ まあ！気をつけることね！  
 エクトール でも……  
 真向かいを見る。  
 エンマ まあ！何てこと！何なの？……夫が女と差し向いで！……ああ！ひどい！……まあ！あの極悪人！まあ！あのごろつき！まあ！あの卑劣漢！……まあ！あの……（エクトールに。）私のコート！コートはどこ？  
 コートを探しながらテーブルの周りを回る。  
 エクトール（同様に探しながら、彼女の後をついてまわる。）彼女のコート！コートはどこだ？  
 エンマ エクトールが肩にはおったコートに気付いて。あなたが私のコートをはおっているじゃない？  
 エクトール おや！確かに！  
 コートを返す、コートを彼女は帽子同様急いで着る。  
 エンマ まあ！痛い目にあわせてやるわ！退出。

## 第五場

エクトール 肘掛け椅子に倒れ込むように座り。ふうー！……やっと帰った！ああ！なんて女だ、まったく、なんて女！もうダメだ……ああ！でも、もし彼女が戻って、

ノックする、ベルを鳴らす、チャイムをうるさく鳴らすかもしれないが、もう開けないからな！……うんざりだ、ぼくは！……（くしゃみする。）ひどい風邪にさせやがって。さあ！思うに、窓を閉めてもいいよな、今は。（立ち上がり、窓辺に行く。）えっ！どういうことだ？そんな、まさか！でも、あのワンピース！見覚えがある！……間違いない、妻のだ、彼女のガーネット色のワンピース、彼女の例のざくろ色のワンピースだ……ひどい！あのブラジル男がぼくの妻と差し向いでいる！ああ！見るにたえん、ろくでなしの女め！それなのに、実家のお母さんのところにいると思っていたとは！……ああ！でも、こんなふうには終わらせてはおかないぞ！復讐してやるからな、分かったか？必要なら、闘う……ハンドドリルで闘ってやる！どうでもいいさ、二週間練習するから、それだけのことだ……（ある考えが閃いて）それよりも良い方法が！そうだ。復讐してやる、でも他のやり方で……ああ！あの女が戻ってきてくれたらなあ！（ベルの音。）鳴った、彼女だ！……急いで開けてやろう！  
 退出。

## 第六場

エクトール、エンマ

エクトール ひどく興奮して。入ってください、マダム、早く入って！  
 エンマ 笑いながら入って。あはっはっは！ムッシュー、おかしな出来事なの！……  
 エクトール まあ！お願いですから、マダム、笑わないで！  
 エンマ でも一体どうしたの？  
 エクトール どうしたって、マダム、さっきあなたがぼくに頼んだことですが……今から一所懸命引き受けます！……ここに、窓の側に来てください。  
 エンマ まあ！そう！でも、もうその気はないわ！  
 エクトール 何ですって？その気がない？でも、要求しますよ、ぼくは、復讐しなければならぬ、彼女に同等の刑罰を加えてやらなければならないことがあなたには分からないから、歯には歯を！目には目を！妻には妻を！ハンドドリルにはハンドドリルを！  
 エンマ でも、ムッシュー……  
 エクトール 彼女に向かって歩いて行き。まあ！来なさい、マダム、窓のところに来るんだ、あんたを抱きしめ、キスで覆い、要するに口説いてやるから！  
 エンマ 少し脅えて後ずさりながら。まったく！あなた、どうかしているわ！一体どうしたの？  
 エクトール 窓辺に行き。何ですって！ぼくの妻がぼくを裏切って、あなたの夫……あなたのアルシビアドと一緒にいることがお分かりじゃない？

エンマ あなたの奥さんが！ご冗談でしょう、きっと！  
エクトール ああ！そう！冗談にしたいですよ……彼女のワンピースに気付かなかったかのようにね！  
エンマ 彼女のワンピース！そうじゃないの、あなた、ほけてるわ……あれは新しいメイドなの……  
エクトール 誰が本当にするものか、マダム！見たんですよ、確かにね？  
エンマ でも、本当なの！ローズとかいう娘なの、ご存知のはずですよ、お宅を首になったのですから。  
エクトール ローズ？何ですって、ほくの所の元メイド？……  
エンマ そうですとも。  
エクトール まさか？何だって！……ひょっとして？……  
エンマ 彼女その人なの、私がいなかったものだから、私の夫が面会したの、それだけのこと！さあ、納得できた？  
エクトール テーブルの近くに座りながら。ああ！マダム、ほっとしました！  
エンマ それにしてもなんて嫉妬深い、あなた方男の人って！そんなふうには、理由もなく……  
エクトール 立ち上がりながら。でも、マダム、あのワンピースを……あのメイドが……あっ！でも、よく考えてみると思い出しました！そうでした、妻が彼女にあげたんです……（また座って。）ああ！マダム、なんてご親切に！まるであなたの胸にスグリのゼリーを注がれたかのように……それなのに、ほくはかわいそうな可愛い妻を疑っていたなんて！……ああ！いくらでも彼女に許しを乞います！  
エンマ そうするのがいいわ、ムッシュー！さあ、私の夫もそうしてくれた……だから許してあげたわ……

エクトール すると、もう復讐はしない？  
エンマ ああ、私は！しないわ、確かにね！でも、あのね、夫に私たち見られてしまっているの！  
エクトール 脅えて。見られた？  
エンマ その通り！私が話していたあの老婦人は誰だと訊かれさえたわ……  
エクトール まさか！老婦人というのは……それって……  
エンマ そうなのよ！で、私、あなたは寄宿舎の友だちの一人の義理のお母さんと答えた！以上！  
エクトール 義理の母、ほくが？ああ！義母は厳しいですよ！……まあ、その方が常にハンドドリルよりはましさ！  
エンマ それでは、ムッシュー、おいとまさせていただくわ……戻ってきたのは、あなたの不親切にお礼をいうためなの。  
エクトール 驚いて。それはどういうことですか？  
エンマ だって、そうなの……というのも、そうでなければ、夫に復讐していた……そうしたら夫は私に許しを乞うこともなかったでしょうから……  
エクトール 確かに、しかし。  
エンマ まあまあ、ムッシュー、別の機会にね。  
エクトール ああ！マダム、何なりとあなたの仰せのままに！（お辞儀して。）マダム！  
エンマ お辞儀して。ムッシュー！（床が叩かれる音。）何かしら？  
エクトール 気になさらずに！階下の住人が砂糖を割っているんです。（傍白。）まったく！明日早々に、引越してやる！（大声で。）マダム。  
エンマ お辞儀して。ムッシュー。

幕

## 解 説

翻訳に用いたのは、Feydeau, *Par la fenêtre et autres pièces*, Larousse, 2006. である。「窓から」を始め、「恋とピアノ」、「極悪人」、「婚約者の卵」の四編が収められている。どれもが好奇心を刺激するタイトルである。「窓から」以外の作品も、機会と翻訳エネルギーがタイミングよく結びつくことがあれば、訳すかもしれない。それは曖昧な未来、頼りにならない約束であり、確約することはできないけれど。その実現可能性は——私なら「窓から」のエクトールが躊躇するのは違い、あなたのようなまんざらでもない女性からの口説いてという命令には即座に従う、その確率が100%だとすると——100%というわけにはいかない。けれども、その実現可能性は——あなたがドン・ジュアンに誘惑に屈服する美女のように私の誘いに無抵抗に応じてくれる、その確率が、今、手を握り返してきたところをみると少なくとも0%ではないとすると——期待を込めて77%くらいはあるかもしれない。いずれにしても、好機を逃さず、詰めを誤らないようにしなければ。

作者のジョルジュ・フェドーは1862年にパリで生まれ、1921年に死亡、モンマルトル墓地に埋葬される。1889年の結婚、その相手マリアヌ・カロリユス＝デュランとの間で、四人の子供に恵まれる。幸せな家庭生活に見える。しかし「絵に描いたような幸せ」という言い方があるけれど、この紋切り型の表現から、まやかし、胡散臭さ、嘘が染み出すように、そんな100%の幸せなど存在しない。幻想なのだ。彼の芝居同様、現実の結婚生活、夫婦の間には色々問題がある、あるものなのだ。簡単に紹介する。1904年、フェドー夫妻の財産の法的分離。1909年、夫婦別居、フェドーはサン＝ラザール駅近くのテルミニウス・ホテルに移り住む。1916年、離婚。1919年、フェドー、梅毒による最初の精神障害。リュエイユ＝マルメゾンの精神病院入り。(同時期の文化、芸術、歴史、政治的出来事に目を転じると、19年にヴェルサイユ条約、八時間労働法。20年にアンドレ・ブルトンの『磁場』。国際連盟。無名戦士の墓。21年は、ピランデッロの『作者を探す六人の登場人物』、チャップリンの『キッド』。) テキストの年表には詳しい記述はないので想像するしかないのだが、その後フェドーは恐らく病院を出ることのないままだったのであろう。そして21年の6月5日に永眠。

『窓』から読みとれるフェドーの芝居の特徴を指摘しておく。登場人物の一人(この場合はエクトール)の日常が非日常によって不意に掻き乱されて、混乱に適応できない彼がとまどい、イライラを募らせていく。そうこうする内に、非日常は不意に去り、彼はまた、何事もなかったかのように日常の中に取り残される。これが基本

構造である。掻き乱される彼の日常のもっかの関心事が昼食をとるという瑣末かつ重要なことであるだけに、エクトールはなおさら滑稽に見える。同情を誘う。空腹が満たされている無関係な読者・観客は余裕を持ってエクトールの不運を笑うことができる。空腹を満たせないイライラを体験したことのある読者・観客はエクトールの不運に我が身を重ね合わせて、苦い自己憐愍と自己嘲笑を覚えつつ、自分が不運の当事者でないという幸運を喜ぶことができる。出現する非日常が口説いてという突飛な依頼であるだけに、その依頼主エンマの理不尽、強引で傍若無人な女神のような印象、惑乱をもたらす魅力的な女性という存在性が一層際立つ。可笑しさを強調する動きや口調を指示するト書き、表面上の丁寧な言葉を裏切る傍白の悪態・雑言、恐怖と異国趣味(ハンドドリル、ブラジル)の喜劇的転換利用、勘違い・見間違い・誤解など、読者と観客を笑わせずにはおかない喜劇に不可欠な演劇手法・要素が、フェドー一流の洗練と冷静と軽妙、観客を楽しませようとする劇作家の意識と戦略を持って、ふんだんに盛り込まれている。モノローグの使い方も巧みだ。それが不在の登場人物(ローズ、アルシビアド、ポタン夫人)の存在を浮き上がらせ、語り手との関係性を際立たせる手法として、効率的効果的に機能している。

かのサシャ・ギトリ(そういえば、この演劇人もフェドーと同じくモンマルトル墓地に埋葬されているのではなかったか)はフェドーを評して「運命に恵まれた」人間だと言っている。運命の恩恵は彼の劇作の才能にまで及んでいて、フェドーは観客を「間違いなく、必然的に、選んだ瞬間に、一定の時間笑わせる能力」を付与されていた。私たちは、フェドーの年表にある7歳で最初の戯曲を書いたというような記述から、彼の早熟な言葉の才能を伺い知ることができる。フェドーは16歳の時を最後に、いかなる学校にも通わなくなっただけで、フェドーのようにミュージックに愛された劇作の天才には、——私のような大学に職を得ている者、それも少なからず言葉を教えることに関わっている人間が次のように断言するのは躊躇しないでもないけれど——それ以上の学校教育は必要ない、無駄だし有害でさえある。それは学校とは無縁になって以降、フェドーの戯曲が堰を切ったように数多く発表されていった事実が証明している。『窓から』は1882年、彼が弱冠20歳の時の作品である。私は真摯に驚き、その才能の前に静かに頭を垂れるのみだ。

映画『モンテニユ通りのカフェ』(監督ダニエル・トンプソン)のカフェ常連客の一人は女優である。ヴァレリー・ルメルシエ(『カドリーユ』、『恋するシャンソン』など)演じるころのその女優が舞台稽古している芝居は、フェドーの『裸で歩き回らないで』*Ne te promène pas toute nue* である。(誘惑的なタイトルだ。) 解釈を

めぐる考え方の違う演出家と女優の言葉の応酬が面白い。フェドーの芝居がこうして今でも多様な解釈を施されて上演されていることが分かる。モンテーニュ通りというのはシャンゼリゼ通りから折れてセヌ川の方、アルマ広場につながる通りで、広場の前はアルマ橋。橋の

たもとはバトー・ムーシュの乗り場になっている。さて美しいあなたに提案だ。セヌ河岸の風景を楽しむ遊覧船に乗ろう。今日は川風が気持ち良さそうだ。戻ったら、ホテルのバーで一杯やろう、夜の快樂の前のアペリティフのように。